

第二章 アルカーイダの理論指導者ザワヒリの二段階イスラム革命戦略

藤原 和彦

国際的イスラム・テロ組織アルカーイダの理論指導者アイマン・ザワヒリは2001年末発表した著作『預言者の旗の下の騎士たち』^(注1)で二段階のイスラム革命戦略を示した。この戦略は第一段階で、テロによってイスラム世界から欧米・異教勢力を駆逐する。墮落した地元政権から西側勢力という後ろ盾を奪うのが狙いだ。そして、第二段階で、後ろ盾を失って弱体化した地元政権を打倒し、代わって真正なイスラム国家を建設する。『預言者の旗の下の騎士たち』発表の1年半後、イスラム世界の心臓部サウジアラビアでアルカーイダ細胞のテロ活動が始まった。一連のテロ攻勢には、ザワヒリの二段階革命戦略の形跡が色濃く窺える^(注2)。本稿では、ザワヒリの革命戦略の変遷を、イスラム原理主義運動の伝統的戦略論である「近い敵、遠い敵論」を軸に辿ってみる。

1. 原理主義運動の伝統戦略「近い敵・遠い敵論」

はじめに、イスラム原理主義運動の伝統的戦略論である「近い、遠い敵論」を説明しよう。この戦略論は、イスラエルやアメリカなどの「遠い敵」に先立って「近い敵」つまりイスラム世界内部の既存の世俗主義政権を撃つべしというもの。シャリーア(イスラム法)上の根拠は、コーラン第9章「改悛」124節の「これ、信者の者よ、汝らの身近にいる無信仰者たちに戦いを挑みかけよ」に置いている。

「近い敵、遠い敵論」は、エジプトのイスラム過激原理主義組織「ジハード団」の理論指導者ムハンマド・ファラグが同団の戦略に採用した。そして、ジハード団が81年10月強行したサダト・エジプト大統領暗殺事件の戦略になった。これを契機に「近い敵、遠い敵論」は中東・イスラム世界で一気に有名になった。またファラグが同戦略を説いた小冊子『隠された責務』は“サダト大統領暗殺教本”としてイスラム原理主義者の間でひっぱりだこになった^(注3)。

ファラグはサダト大統領暗殺事件の実行犯ではなかったが、事件直後逮捕され、事件の首謀者として軍事裁判に掛けられた。事件翌年の1982年3月、カレド・イスランプーリ中尉ら暗殺実行犯4人と共に死刑判決を受け、翌4月処刑された。処刑されたことで、ファラグはイスラム原理主義運動の殉教者となった。加えて、ファラグが唱えた「近い敵、遠い敵論」も一種の“聖性”を帯びることになった。

アルカーイダの理論指導者ザワヒリも、ファラグの「近い敵、遠い敵論」にとりわけ強い影響を受けている。というのも、エジプト出身のザワヒリは青年時からジハード団員で、サダト暗殺事

件当時は同団の幹部の一人だったからだ。

1951年カイロの名家に生まれたザワヒリは早熟で、15歳でイスラム原理主義運動に加わった。カイロ大学医学部在学中にジハード団に参加した。サダト大統領暗殺事件に連座して逮捕されたが、事件に直接関わらなかったためか禁固3年の刑に留まった。刑期を終えた85年、アフガニスタン戦争のイスラム義勇兵(アラブ・アフガンズあるいはアフガン・アラブと言う)に応募して出国、パキスタンのペシャワールに落ち着いた。同地でジハード団を再建し同団のエミール(最高指導者)となった。

ザワヒリはまたペシャワールでサウジアラビア出身のオサマ・ビンラーディンと知り合い、急速に親しくなった。資産家のビンラーディンは、以後ジハード団の資金パトロンとなった。ビンラーディンはその後、米政府から「テロのファイナンサー」と呼ばれることになる。

アフガニスタン戦争終結後の1993年初め、ザワヒリはエジプト内ジハード団細胞に指示して武装闘争を開始した。世俗的なムバラク政権打倒が目標だった。エジプトのもう一つのイスラム過激原理主義組織「イスラム集団」もジハード団に先駆け前年初めからムバラク政権打倒の武装闘争に入っていた。ザワヒリはエジプトの隣国スーダンからジハード団の武装闘争の指揮を取った。爆弾テロを主要戦術に、まずムバラク政権幹部の暗殺を図った。ざっと10年前ファラグ指導下のジハード団が採った「近い敵、遠い敵論」の踏襲だった。

しかし、爆弾テロは必然的に一般ムスリム大衆を巻き込み、罪のない犠牲者が続出した。中でも、1993年11月アテフ・セドキ首相の車列を狙った爆弾テロの巻き添えで女学中学生が死亡すると、エジプト国民の間にジハード団批判が噴出した。ザワヒリはこれを境に武装闘争を停止した。一方、イスラム集団の武装闘争は1997年末まで続いた。

2. 「伝統的ジハード論」と「ウンマ内部のジハード論」

ジハード団のエジプト内武装闘争の停止は同時に、「近い敵・遠い敵論」の行き詰まりを意味した。実際、ザワヒリはエジプト内武装闘争を停止すると、「戦場」と「敵」を遠隔地、つまり「遠い敵」に求める戦略転換に出た。新たな「戦場」と定めたのは旧ユーゴスラビアのイスラム教徒自治州コソボだった。また、新たな「敵」は旧ユーゴの支配宗派、キリスト教セルビア正教徒だった。当時、同自治州では、アルバニア系イスラム教徒住民に対するセルビア正教徒の迫害の懸念が強まっていた。

ザワヒリの狙いは、イスラム教徒住民と提携してコソボ自治州からセルビア正教徒勢力を駆逐することだった。このため、ザワヒリはまず同自治州に隣接するイスラム国アルバニアに足場を築こうとし、ジハード団メンバーを相次いで同国に送り込んだ。好都合なことに、当時のアルバニ

ア政権(サリ・ベリシャ政権)はイスラム原理主義運動に好意的だった。

ところで、イスラム世界には、世界を「ダール・ル・イスラム」(イスラムの家・領域)と「ダール・ル・ハルブ」(戦争の家・領域)に二分する伝統的世界観がある。「イスラムの家」はイスラム教徒の存在が支配的な領域を指し、「戦争の家」は異教徒の領域を指す。イスラム教徒のジハード(聖戦)はこの世界観から説明される。つまり、ムスリム(イスラム教徒)の戦争の家との主体的な戦いがジハードだ。また、(こうした)戦争の家とのジハードは、ジハードの基本的な形態ということで「伝統的ジハード」と呼ばれる。伝統的なジハードはさらに、イスラムの家から戦争の家に仕掛ける戦いと、戦争の家の攻撃からイスラムの家を守る戦いに分けられる。前者が「攻勢(拡大)的ジハード」で、後者が「防衛的ジハード」だ。

防衛的ジハードと攻勢的ジハードではムスリムの参加義務のレベルが異なる。防衛ジハード参加の義務はファルド・アイン(イスラム教徒すべての個人的義務)とされ、不参加は許されない^(注4)。イスラム史における防衛的ジハードの代表例は11世紀から13世紀に掛けた十字軍戦争だった。

また、伝統的ジハードとは別に、イスラム世界にはイスラムの家内部のジハード論も古くから存在する。「ウンマ(イスラム共同体)内部のジハード論」と呼ばれるものだ。イスラム教の信仰告白を行って、形式上はイスラム教徒になっていても、シャリーアに背く者(支配者・政権)は誰でもあれ、撃つてもよい、いや撃つべしとする急進的なジハード論だ。

実は、ジハード団の戦略「近い敵・遠い敵論」は、この「ウンマ内部のジハード論」に他ならない。サダト大統領暗殺の理論指導者ファラグは『隠された責務』で、「敵は祖国の中に存在する。支配の座にある者が実際の敵だ。代表的な敵は権力を振るう諸政府だ」と説いた。ファラグはそのうえで「邪悪な支配者」に対するジハードを、同朋イスラム教徒に敵対する戦いではあっても、十字軍戦争と同様の「防衛的ジハード」と位置づけた。また、すべてのイスラム教徒の個人的義務、つまりファルド・アインだとした。

3. 原理主義勢力の「一国派」潮流と「国際派」潮流

現代のイスラム原理主義勢力は、そのジハード戦略として「ウンマ内部のジハード論」を採るか、あるいは「伝統的ジハード論」を採るかで2つの潮流に分けられる。「ウンマ内部のジハード論」を採る勢力は、1つのイスラム国の原理主義革命を最優先することから「一国(主義)派」と呼ぶ。一方、「伝統的ジハード論」を採る勢力は、アメリカをはじめとしたキリスト教徒・ユダヤ教徒勢力との戦いを優先することから「国際(主義)派」と呼ぶ。

歴史的には「一国派」がまずエジプトで登場した。その代表的組織がジハード団とイスラム集団だった。しかし、アフガニスタン戦争(1979年-89年)で転機がやってきた。同戦争にアラ

ブ・アフガンズとして参戦した「一国派」の中から「国際派」が生まれたからだ。その旗手が、ビンラーディンだった。ビンラーディンはアフガニスタン戦争末期、仲間のアラブ・アフガンズと語らってアルカーイダ(基地の意)を結成した。史上初の「国際派」組織だった。当初は互助会あるいは戦友会の性格が強かったが、間もなく“怪物化”し、世界各地で大規模な反米テロを繰り返すようになった。

さて、ザワヒリはジハードの「戦場」をエジプトから旧ユーゴ・コソボ自治州に移し、「敵」をムバラク政権から旧ユーゴのセルビア正教徒に変えた。これはジハード論から言うと「ウンマ内部のジハード」から「伝統的ジハード」への戦略転換となる。ちなみに、ジハードの性格は同じ「防衛的ジハード」で変化はない。ジハード団の「コソボ作戦」の狙いが、イスラム教徒の自治州コソボ、つまり「イスラムの家」の防衛にあったからだ。

一方、原理主義運動2潮流の観点からすると、ジハード団はこの戦略転換で「一国派」組織から「国際派」組織に変身した。実際ザワヒリはこの時期「国際派」の旗手ビンラーディンとの同盟関係を一段と深めている。ザワヒリの戦略転換にビンラーディンが大きな影響を与えたとの情報も多い。2人は1988年2月、イスラム世界の過激原理主義組織を糾合し「ユダヤ人と十字軍に対するジハードのための世界イスラム戦線」(略称・世界イスラム戦線)を立ち上げた。アルカーイダは史上初の「国際派」組織だったが、世界イスラム戦線は史上初の「国際派」連合組織だった。

しかし、ジハード団のコソボ作戦は98年夏打ち切りに追い込まれた。アルバニアとその周辺地域に潜入した同団幹部が、米中央情報局(CIA)の反テロ網に摘発され相次いで逮捕されたためだ。逮捕者は12人にも上った。ザワヒリの右腕で、コソボ作戦の最高責任者だった人物も逮捕され、作戦の継続が不可能になった。逮捕されたジハード団幹部はエジプトに強制送還され、拷問を含め厳しい取り調べを受けた。有力幹部の1人は拷問に屈し、ジハード団の内情を詳細に自白した。この結果、同団は一時的に“丸裸”の状態になった。

エジプト政府は1999年2月、ジハード団員106人(うち欠席裁判62人)を裁く大掛かりな裁判を開いた。アルバニアから送還されたジハード団幹部が被告団の中核になったため「アルバニア帰り裁判」と呼ばれた。4月、ザワヒリ(欠席裁判)ら9人に死刑判決が下った。ザワヒリ自身も一時コソボ入りを図ったが失敗し、1997年半ば以降アフガニスタンに戻っていた。

4. ザワヒリのジハード団エミール辞任とアルカーイダ合流

こうした中、ジハード団内部ではザワヒリに対する批判が強まった。批判は、ザワヒリがジハード団の伝統的戦略である「近い敵・遠い敵論」に背き (1)ジハードの戦場をコソボはじめエジ

プトの外に求めた (2)「国際派」のビンラーディンと同盟関係を結んだ——ことを槍玉に挙げた。批判派は、ザワヒリが反米テロを叫ぶビンラーディンと同盟を結んだため、ジハード団が米政府の目の敵にされたと非難した。ビンラーディンと同盟関係になればアルバニアなどで幹部がCIAに摘発されることはなかった、という主張だった。

内部批判は最終的に、1999年夏ザワヒリのジハード団エミール(最高指導者)辞任に繋がった。アラブ・メディアの報道だと、ザワヒリは同団内部の亀裂の深刻化を懸念して自ら辞任したという。この際、ザワヒリは支持者(約100人から500人)を率いてジハード団を離脱しビンラーディンのアルカーイダに合流した。合流組とアルカーイダは2001年6月正式合併し、新組織名を「カーイダ・アル・ジハード」(「ジハードの基地」の意)とした。新組織の最高意思決定機関「マジュリス・シューラー」(諮問評議会)は9人で、うち旧ジハード団員が6人を占めた^(注5)。

ザワヒリがアルカーイダに合流した3カ月後の2001年9月アメリカ中枢同時多発テロ「9.11テロ」が発生した。同テロの首謀者はアルカーイダ軍事委員会委員長カリド・ムハンマドだった。ドイツ在住のアラブ人留学生が作る「ハンブルク細胞」が実行部隊となり、サウジアラビア細胞が「兵隊役」としてテロに参加した。9.11テロにザワヒリがどう関わったかは明らかでない。ザワヒリとカリド・ムハンマドとの関係もはっきりしない。後者の生地はクウェートだが、父親はバルチスタ出身のパキスタン人で、ザワヒリとの接点は少ない。

一方、9.11テロはアメリカの史上初の「対テロ戦争」発動を招いた。この結果、まずアフガニスタンのイスラム原理主義「タリバン」政権が崩壊した。同政権はアルカーイダばかりでなく各国原理主義勢力のセイフヘイブンになっていた。それだけにイスラム原理主義運動全体にとって取り返しのつかない痛手となった。さらに、アルカーイダ自体も大きな打撃を受けた。最高指導部ビンラーディンとザワヒリは生き延びたが、多くの幹部が戦死、あるいは逮捕された。9.11テロの首謀者カリドも2003年3月パキスタンで逮捕された。

5. ザワヒリが『預言者の旗の下の騎士たち』を発表

ブッシュ米政権が9.11テロの翌月「対テロ戦争」に踏み切りアフガニスタン空爆を開始すると、ザワヒリはビンラーディンとともに東部の山岳地帯トラボラに潜伏した。こうした中、ザワヒリは自ら「遺書」と呼ぶ著作『預言者の旗の下の騎士たち』を書き終えた。原稿はザワヒリの密使がロンドン発行の汎アラブ紙アッシュアルクルアウサトに届け、同年12月、同紙上で連載された。

ザワヒリが『預言者の旗の下の騎士たち』の中で示したのが、二段階からなるイスラム革命戦略だった。同戦略は本稿冒頭で述べたように「第一段階は、テロによってイスラム世界から欧米・異教勢力を駆逐する。狙いは、墮落した地元政権から西側勢力という後ろ盾を奪うこと。そ

して、第二段階は、後ろ盾を失って弱体化した地元政権を打倒し、代わって真正なイスラム国家を建設する」というものだ。

『預言者の旗の下の騎士たち』第11章「将来の地平」で、ザワヒリはまず、第一段階の戦術としてジハード＝テロは不可欠だと強調した。そして、イスラム世界内で西側権益を撃つテロの効用を次のように述べた。

「アメリカ人とユダヤ人を我々の国(イスラム国の意)で撃つことにより、我々は三度勝利することができる。第一に、その手先たち(イスラム世界内既存政権の意)の背後に隠れている大きなマスター(アメリカの意)に打撃を与えることができる。第二に、ムスリム社会が好む標的(イスラエル、ユダヤ人の意)つまり、それを撃つ者たちにムスリム社会が同情する標的を選ぶ時、ムスリム社会を味方に引き入れることができる。

三番目に、マスターであるアメリカ人とユダヤ人を守るために(イスラム世界内)既存政権が我々を攻撃する時、ムスリムの前で同政権の正体を暴露することができる。これによって既存政権は、その醜い顔——(「イスラムの家」の)占領者、ムスリム社会の敵に忠実に奉仕する雇われ警察官の顔——を現す」

ザワヒリはまた、二段階イスラム革命戦略の当面の目標を「イスラム世界心臓部における純粋なイスラム国家の樹立」とし、要旨次のように述べた。

「軍隊の勝利は、歩兵が領地を占領して初めて達成される。同様に、世界同盟(アメリカ主導の西側世界の意)に対するイスラム運動の勝利も、これら運動がアラブ地域の心臓部にイスラムの基地を所有して初めて獲得される。イスラム・ネーション(イスラム教徒共同体＝ウンマ・イスラミヤ＝の意)を動員し武装しても、域内に原理主義国家が樹立されない限り、手に触れる結果がなにもない、いわば宙に浮いた状態が続く。

イスラム世界の心臓部にムスリム国家を樹立することは容易ではなく、また手近な目標ではない。しかし、崩壊したカリフ制を回復し、その栄光を取り戻すことはムスリム・ネーションの希望である。加えて、原理主義運動は性急に(世界同盟と)衝突してはならず、忍耐強く勝利を求めねばならない」

ここで注目されるのは、ザワヒリがイスラム原理主義革命戦略の2つの潮流である「一国派」と「国際派」の主義融合を図っていることだ。

6. 二段階革命戦略における「一国派」主義と「国際派」主義の融合

ザワヒリの二段階革命戦略の第一段階は、西側とりわけアメリカ、イスラエルの権益をテロ攻撃の標的とする。これは実質的に「国際派」の戦略そのものだ。もともと、ザワヒリはイスラム世界

内部での西側権益攻撃を強調するが、国際派はイスラム世界の外、つまり「戦争の世界」でのテロ作戦(例えば「9.11テロ」)を強調する。しかし、「イスラム世界からの西側勢力の駆逐」という狙いに差異はない。イスラム世界「外」のテロ作戦は、イスラム世界「内」テロ作戦のバリエーションと説明できる。

一方、第二段階はイスラム世界の世俗的な既存政権打倒を目標とする。これは「一国派」の戦略そのものだ。ザワヒリは二段階イスラム革命戦略を説くことで、いったんは背を向けた「近い敵・遠い敵論」への回帰を図っている。

ところで、ザワヒリが『預言者の旗の下の騎士達』で、二段階革命戦略にたどり着いた最大契機と匂わしているものに、1992年以來の「アルジェリア危機」がある。同危機は、アルジェリアのイスラム原理主義勢力「イスラム救世戦線(FIS)」が総選挙で圧勝しながら軍部の弾圧で政権に就けなかったことが発端となった。ザワヒリは、FIS弾圧に踏み切ったアルジェリア軍部の背後に西側勢力フランスの存在を指摘する。どうやらザワヒリは、ここから「西側勢力の後ろ盾を駆逐しなければイスラム世界の既存政権打倒は不可能」との結論、つまり二段階革命戦略の基本理念を得たように見える。

ザワヒリが『預言者の旗の下の騎士達』で二段階革命戦略を示してから2年、同戦略を直接反映したとみられるアルカーイダ関連組織の声明も現れた。2003年11月トルコ・イスタンブールで発生した4件の自爆テロの際「アブ・ハフス・アル・マスリ部隊」と名乗る組織が発表した犯行声明がそれだ。同声明は、イスラム世界専制政府に対する原理主義勢力の戦いに干渉しないようアメリカに要求したからだ。同声明はまた、原理主義勢力の最終目標としてイスラム・カリフ制国家の樹立を挙げた^(注6)。

この組織の名前、アブ・ハフス・アル・マスリは、かつてアルカーイダ最高幹部の一人だったエジプト人、ムハンマド・アテフのゲリラ名だ。アテフは元ジハード団員で、ザワヒリが1980年代末アルカーイダに“助っ人”として送り込んだ人物だった。2001年11月アフガニスタンで米軍の空爆に遭い死亡した。なお、同年はじめ娘がビンラーディンの息子と結婚している。「アブ・ハフス・アル・マスリ部隊」が組織的、思想的にアルカーイダはもちろん、旧ジハード団、さらにはザワヒリに極めて近いことがうかがえる。

－ 注 －

1. Fursan tahta rayat al-nabey (Horsemen Under the Prophet's Banner) By Ayman al-Zawahiri, 85pages, Cairo, al-Makrabah al-Islamiyyah. 『預言者の旗の下の騎士たち』は2002年初め、カイロで刊行されたが、エジプト政府によって直ちに発禁処分となった。

2. 2003年5月7日、サウジアラビアの首都リヤドで外国人用コンパウンド(集合住宅)3カ所がほぼ同時に自爆テロの襲撃を受けた。アメリカ人8人ら25人が死亡、自爆犯も9人が死亡した。このテロは、サウジ内アルカーイダ細胞がイラン潜伏のアルカーイダ指導部の指示で行ったと報道された。以後、アルカーイダ勢力摘発・取り締まりを本格化したサウジ治安部隊とアルカーイダ細胞の銃撃戦がサウジ各地で頻発した。12月末までにアルカーイダのメンバー約20人が殺害され、約600人が逮捕された。

12月9日、リヤドの外国人用コンパウンドが再びアルカーイダ細胞の自爆テロに襲われ、18人が死亡した。前回と違い、襲撃されたコンパウンドにはアメリカ人は1人もいなかった。犠牲者の大半はレバノン人などアラブ人ムスリムだった。また、襲撃されたコンパウンドの近くには、サウジ王族の邸宅があったと報じられた。

一方、12月4日、リヤドでサウジ内務省のアブドルアジズ・アル・フェイリニ少将が銃撃された。少将は軽傷に留まったが、兄弟が重傷を負った。少将は内務省のナンバー3で、テロ対策の最高責任者だった。事件後間もなく、「アル・ハラマイン部隊」と名乗る組織がイスラム系インターネット・サイトで犯行声明を発表した。同声明は「(襲撃は)同朋アルカーイダが十字軍(アメリカの意)との戦いで多忙なため、我々自身が行ったものだ。2つの聖モスクの地(サウジアラビアの意)から十字軍の手先(サウジ王室の意)を排除し、浄化するためだ」と述べた。しかし、襲撃目標であるフェイリニ少将の名前には触れなかった。「アル・ハラマイン部隊」の存在はこれまで知られていなかったが、声明内容から、アルカーイダの姉妹組織とみられる。なお、サウジ政府は、犯行声明が出たにもかかわらず、フェイリニ少将襲撃事件が起きたことは秘密にし続けた。

12月29日、リヤドでサウジ内務省の捜査局「マバーヒス」に所属する少佐が襲撃された。マバーヒスは米連邦捜査局(FBI)に相当する部局だ。リヤドからの報道は、同少佐が豪華な車を出た直後、爆発が起きたと伝えた。同少佐は無事だった。

12月11日、米大手新聞社Knight Ridder/Tribune News Serviceは、米諜報機関当

局者(匿名)などの話として『米中央情報局(CIA)インテリジェンス・メモランダム』の内容をすっぱ抜いた。それによると、同メモランダムは、アルカーイダが世界最大の石油産出国サウジで騒乱状態を醸成し、王室を転覆させる努力を強化すると決定した旨を警告しているという。また、このCIAのアセスメントは「先週」つまり12月はじめにまとめられたとされる。なお、「CIAインテリジェンス・メモランダム」は、その一部がブッシュ大統領にも上げられる最高機密という。

2003年5月に始まったアルカーイダのサウジ内テロ活動は当初、サウジからアメリカ兵はじめ欧米人を駆逐するのが主要目的、つまりザワヒリが説くイスラム革命戦略の第一段階にあるとみられてきた。しかし、Knight Ridderが報じたCIAアセスメントはこの見方を覆し、アルカーイダがサウジ王室打倒、つまりイスラム革命戦略の第二段階に入っているとの判断を示したことになる。

3. 「近い敵、遠い敵論」の主唱者ファラグについて、パリ政治学院教授のジル・ケペル(Giles Kepel)は著書『エジプトにおけるムスリム過激主義』(Muslim Extremism in Egypt, University of California Press, 1993)で、「ファラグは、ジハード(聖戦)をイスラム教徒の間で長期にわたって隠されてきた宗教責務と見なし、その回復を自分の任務と考えた。ファラグはまた、ジハードをイスラム国家の支配層と闘うための唯一の効果的な方法と見なした。というのも、ジハード以外の方法はすべて失敗に終わったからだ」と書いている。
4. 一方、攻勢的ジハードへの参加義務はファルド・キファーヤ(集団的義務)とされ、防衛的ジハードより義務のレベルが下がる。ちなみに、ムスリムの義務「五行」のうち信仰告白、礼拝、喜捨、断食はファルツ・アインで、残るメッカ巡礼がファルド・キファーヤだ。
5. エジプトのイスラム原理主義運動専門家ディア・ラシュアン(アルアハラム政治・戦略研究所研究員)はこの辺の事情を「Egyptian Islamist Movement between Pacifism-Democracy and Terrorism-Violence」(2003年11月)で次のように言う。

「(1990年代半ば)アフガニスタン、パキスタン、中央アジアに住むジハード団メンバーのビジョンにファンダメンタルな変化が起き始めた。彼らは、それまでテロの根拠としていた理論に背く1つの理論を採用した。『近く敵と戦う前に、遠く敵と戦わねばならない』とする理論だ。これこそ、アルカーイダ、および同組織に近い(イスラム過激主義の)諸組織が米国、イスラエル、西側全体と対決する際に掲げるスローガンだ。

この新たな戦いは、ひとえに防衛ジハードである。この防衛ジハードの対象(敵)は、これらグループが、ウンマ(イスラム教徒共同体)の領土、人民、権益への外部侵略と見なすものだ。この外部侵略が彼らの支配者達よりも現時点では一層危険だ、とこれらグループは受け止めている。また彼らが、自分たちの支配者を拒否しているのは、これら支配者の統治がイスラムの教えに従わず、しかも外部の侵略者と同盟関係を結んでいるとみなすからだ」

6. 2003年11月19日、イスラム主義系ウェブ・サイト「Al-Mujahidoun」に掲載された「アブ・ハフス・アル・マスリ部隊」の声明は以下の通り。

「我々は以前の声明でこう指摘し、約束した。『アメリカのしっぽ——とりわけ英国、イタリア、オーストラリア、日本について言えば、これら諸国は、ムジャーヒディーンのリダー、オサマ・ビンラーディン師がラマダン前に述べたことを理解しなかった。師はこの時、アメリカの内外での殉教作戦は止まらない・・・、もし、これら諸国が言葉で理解しなければ、死の車が彼らに理解させるだろう、と脅した』。

そして我々はこう述べた。『死の車は、アメリカ政府がムジャーヒディーンが出す条件に譲歩しない限り止まらない』と。そして今やここで、死の車は毎日、当代の専制者(アメリカ)の同盟者達(の魂を)刈り取っており・・・また神の意志により、アメリカは間もなく自らの土地で、ムジャーヒディーンから自衛するために誰かを捜し求めることになる。

今日トルコで、アブ・ハフス・アル・マスリ部隊の前衛達が英国領事ロジャー・ショートを標的にした。彼が(標的として狙われたのは)イスラムとの戦いの広範な経験を有していたため、また、イラク、シリア、トルコ、イランを包含する地域に対する英国の政策の首謀者と見なされていたためだ。我々の死の車は領事館のビルを撃ち・・・、神の思し召しにより、彼は殺害された(略)。

神により、ブッシュは、我々がお前ブッシュのために計画した通りに(イラクおよびアフガニスタンという)罠に落ちた。お前は、お前が生命を愛するのと同様に死を愛してやまない者達との戦争に陥っている。これからやって来ることに心構えをなせ。

犯罪者め、我々の言うことを聴け。死の車は、以下に述べる我々の要求にお前が譲歩しない限り、止まることはない。その要求とは、

- (1) アメリカの牢獄にいる我々の囚人、とりわけグアンタナモの囚人、および(エジプトのイスラム集団の精神指導者。1993年ニューヨーク世界貿易センタービル爆破などで終

身刑の判決を受け、服役中の)オマル・アブドルラハマン師、及びアメリカのしっぽで
あるアラブ、西側、ペルシャ、ユダヤの牢獄の中にいる者達を解放すること。

(2) 対テロ戦争という名目で行っている、イスラムや世界中のムスリムに対する戦争を停
止すること。

(3) ユダヤ人とアメリカ人の卑猥さから、エルサレムとカシミールを含め、すべてのイスラ
ムの土地を純化すること。

(4) アメリカが、我々と——ムスリムを支配している——専制諸政府との間に干渉するこ
とを止めること。また、我々がイスラム・カリフ制国家を樹立すること。

おー、イスラム共同体よ。あなた方はムジャーヒディーンを支援し、勝利させねばならな
い……。神は最も偉大であり、イスラムは進軍している。アブ・ハフス・アル・マスリ部隊(ア
ル・カーイダ)」